様式2

平成28年度　自 己 評 価 表

鳥取県立八頭高等学校

中期目標（学校ビジョン）	1　主体的に学び、自分の言葉で表現できる生徒を育成する。 2　チームで取り組む経験を通し、互いの多様性を知るとともに自己有用感を高める。 3　地域連携の主体となり、地域に根ざした学校としての役割を果たす。（地域の教育センター）

今年度の重点目標

・授業改革を柱とした学力向上の推進　①学力向上に向けた授業改革　②生徒の主体的学習態度育成
・魅力あるコースつくり　①特色ある教育活動　②豊かな人間性の充実
・キャリア教育の充実　①進路決定と自己実現　②将来にわたる主体的・自律的学習者の育成・問題解決能力の育成
・地域を支える人づくり　①八頭タワープロジェクトの充実　②八頭高「愛し愛され運動」の展開

年度当初					評価結果（10）月		
評価項目	評価の具体項目	現状（平成27年度実績等）	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
八頭高生らしい態度の育成	基本的生活習慣の確立による学習と部活動の両立	（1）83%の生徒が、八頭高に入学して良かったと思っている（保護者90%）。 （2）95%の生徒が学校で定められたルールやマナー（服装、頭髪、携帯電話のルール、通学マナー）を守るよう心がけ（保護者97%、職員96%）、84%の生徒が授業の予鈴で着席する等、授業時間を大切にしている（職員68%）。 （3）61%の保護者に、学校の生徒指導方針がよく伝わっている。 （4）60%の生徒（保護者75%、職員58%）が、学校生活において学習と部活動を両立していると考えている一方で、自宅学習を毎日行っている生徒は55%である（1年44%、2年54%、3年69%）。	（1）90%以上の生徒が、八頭高に入学して良かったと思っている。 （2）すべての生徒が学校・社会のルールやマナーを守り、校内・校外を問わず、気持ちの良い挨拶、制服の正しい着こなしが実践され、地域社会から高い評価を得ている。 （3）80%以上の保護者に、学校の生徒指導方針がよく伝わっている。 （4）高校生にとって学業への専念が第一義の目的であること、その一方で、部活動が人間力を伸ばす何物にも代えがたい経験であることを理解した上で、70%以上の生徒が自宅学習を毎日行い、学習と部活動を両立させている。	（1）（2）（3）PTA総会・個人懇談、八頭高ホームページ等を通して、保護者の生徒指導方針についての十全な理解を図り、生徒・職員・保護者の緊密な連携により、自主性や自律性を育む生徒指導を行う。 （4）クラス担任、部活動顧問が連携して、自宅学習時間の確保を図る（部活動開始終了時刻の厳守、クラス担任・部活動顧問の自宅学習時間・進路志望等の情報共有）。	（1）（2）（3）PTA総会（5月）、PTA進路研修会（6月・3年）、PTA個人懇談（7月・全学年、9月・3年）、八頭高だより（7月）、八頭高ホームページ、家庭訪問等を通して教育方針、現状等を発信し、学校・保護者の連携を図っている。 （2）制服の着こなしは概ね良好であるが、自発的な挨拶ができない生徒がいる。マナーアップさわやか運動、交通安全運動等を通して公共マナーの徹底を図っているが、自転車通行状況がよくなかったり、公共物を大切にしない生徒が少数おり、その都度指導を行っている。また、7月実施のスマホ利用時間調査によると、平日1日あたりの利用時間は平均72分（1年67分、2年86分、3年62分）であり、長時間使用の生徒を対象に面談を行い、基本的生活習慣の確立を図った。 （4）7月実施の授業評価アンケートによると、67%の生徒が学習と部活動の両立がほぼできており（1年68%、2年64%、3年70%）、授業に必要な予復習ができているという生徒は50%である（1年52%、2年42%、3年56%）。	C	（1）（2）（3）11月に学校評価アンケート（生徒・保護者・職員対象）を実施し、改善に活かす。1・2年保護者対象のPTA進路研修会（2月予定）によって、進路指導における保護者連携を図る。 （2）挨拶の重要性、公共マナーの遵守等、教職員一人ひとりが同じ規準で粘り強く指導を続ける。スマホ利用調査を実施し、保護者との連携を図りながら長時間利用者の指導を継続する。 （4）授業第一として自宅学習時間を確保させるように、クラス担任、部顧問が連携して指導する。
	自治精神に満ちた活動による他者を思いやる人間関係の構築	（1）「八頭高愛し愛され運動」（6月・12月実施）に延べ280名を超える生徒が参加し、地域や校内の清掃活動を行った。また、生徒会長・副会長の計3名が島根県立隠岐島前高校を訪問して地域活動発表会に参加し意見交換を行った。 （2）中学生体験入学・翠陵祭・八頭高ライフ体験では、生徒会執行部を中心に積極的に企画・運営を行った。 （3）81%の生徒が、八頭高はいじめや差別を許さない実践力を育成する人権教育を推進していると考えており、90%の生徒が安全・安心な学校生活を送っていると感じている。 （4）特別支援教育、教育相談、人権教育等の生徒支援体制により、73%の生徒（保護者67%、職員90%）は、八頭高は心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると考えている。	（1）生徒主体のボランティア活動が年間を通じて実施され、「八頭高愛し愛され運動」の参加者が350名を超えている。 （2）中学生体験入学・翠陵祭・八頭高ライフ体験において、生徒が主体となって企画・実施に取り組み、達成体験を積み重ね、自治精神を醸成する。 （3）90%以上の生徒が、八頭高ではいじめや差別を許さない教育が実践されていると考え、安心・安全な学校生活を送っている。 （4）80%以上の生徒（保護者）が、八頭高は心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると考えている。	（1）（2）「八頭高愛し愛され運動」等を通して地域社会から高い評価を得ることによって、自己肯定感・有用感を高め、八頭高生としてのアイデンティティーを育む。また、生徒の県外研修を実施し、広い視野をもつことの意義を生徒総会等のさまざまな場面において伝える。 （3）hyper－QU、個別面談等を通して生徒の悩みを十分に把握し、教育相談・特別教育支援教育、人権教育等のさらなる推進により、生徒が安心・安全な学校生活を送れるように支援する。	（1）今年度第1回「愛し愛され運動」には220名が参加し、八頭高から郡家駅までのゴミ拾い、八頭高校前駅の清掃等を行うとともに、八頭町立小学校閉校式における書道パフォーマンス・吹奏楽演奏、生徒会執行部による熊本地震義援金の募金活動等を通して、地域を愛し地域から愛される八頭高生のアイデンティティー確立を図った。 （2）八頭高校体験入学（8月）には中学生583名、保護者・中学校教員86名が参加した。翠陵祭（8～9月3日間）では、生徒が主体的に企画・運営を行い、達成体験を得ることができた。 （3）（4）教育相談・特別支援委員会（4月・8月）、hyper－QU検討会（6月）、教育相談係・保健係連絡会（週1回）等によって、学年・教育相談担当・保健係・管理職が個別支援計画、第1回hyper－QU結果（5月）等を共有し、きめ細かい面談を通して必要に応じSC、外部機関と連携している。また、人権教育LHR（6月・7月）、人権問題講演会（10月）、個別面談等によって人権意識の高揚を図り、安心・安全な学校生活の実現を図っている。	B	（1）第2回「愛し愛され運動」（11月）、八頭町立小学校閉校式における書道パフォーマンス・吹奏楽演奏（2月）を通して地域貢献活動を継続する。部活動単位の参加が主流となっているので、部活動未加入者（全校生徒の約15%）が個人で参加しやすい環境を整えることが必要である。 （2）八頭高生が主体となって八頭郡内中学生に高校生活の魅力を伝える八頭高ライフ体験（1月）を通して、自己肯定感・有用感を高めるとともに、自らの生活や学びの在り方を振り返る。 （3）（4）11月に学校評価アンケート（生徒・保護者・職員対象）を実施し、改善に活かす。 （3）第2回hyper－QU（10月）、hyper－QU検討会（11月）、教育相談・特別支援委員会（10月、1月）、教育相談係・保健係連絡会（週1回）、人権教育LHR（11月・2月）等を通して、安心・安全な学校づくりを図る。
キャリア教育の充実	将来にわたる主体的学習者の育成	（1）家庭科・情報科以外の7教科（計27回）で研究授業・研究協議を実施した。 （2）アクティブ・ラーニング（AL）の先進校（岐阜県立可児高校）を訪問し、報告会（8月職員会議）を行った上で、可児高校から講師を招聘して数学・理科に関するAL公開授業を実施した（9月）。また、96%の職員が校内・校外の研修・研究会に参加し、その内、5教科8名が県外研修会に参加した。 （3）1日当たりの自宅学習時間（11月）平均は、1年73分、2年87分、3年183分（1年の2時間以上18%、2年の3時間以上4%、3年の4時間以上38%）である。	（1）（2）全教科で研究授業・研究協議を実施し、アクティブ・ラーニングに八頭高全体で積極的に取り組んでおり、90%以上の職員が校内外の研修・研究会に参加している。 （3）1日当たりの自宅学習時間平均が、1年120分、2年180分、3年240分である。	（1）（2）授業改革に関する授業研究会を年2回（6月、10月）実施し、アクティブ・ラーニング型授業を推進する。全教科が研究授業を実施するとともに、県外研修の成果を職員会議で発表する。 （3）学習評価アンケート、自宅学習時間調査等に基づく細やかな面接指導・教科指導や土曜自習・質問教室、放課後自習室等を通して主体的な学習を促し、進路目標を達成するための自宅学習時間を確保させる。	（1）保健体育科・家庭科以外の7教科（12名）において研究授業・公開授業を実施した。 （2）授業改革に関するAL研修会（6月、9月）を実施し、校外から47名が参加した。また、全教科19名が県外各種研修会に参加した。 （3）7月実施の授業評価アンケートによると、1日当たりの自宅学習時間（塾以外）は、1年2時間以上・平日20%（休日54%）、2年2時間以上・平日10%（休日40%）、3年3時間以上・平日21%（休日26%）である。	C	（1）保健体育科・家庭科の研究授業・公開授業を11月に実施する。 （2）予習・復習の定着、学力向上等につながる学びを促すために、AL型授業方法を検証していく。 （3）クラス担任による面談に加えて、教科担当者による面談を実施し、より具体的かつ効果的な学習指導を行う。
	進路決定と自己実現	（1）進路実現に向けて努力している生徒の割合は、1年61%、2年66%、3年87%である。 （2）進路志望未定者（11月）は、1年7名（4月54名）、2年4名（1年4月19名）、3年1名（1年4月29名）である。 （3）国公立大学志願率（11月）は、1年165名（61%）、2年155名（56%）、3年109名（41%、センター試験出願者149名）であり、平成27年度末の国公立合格者は43名である。	（1）進路実現に向けて努力している生徒の割合が、1年70%以上、2年80%以上、3年100%である。 （2）進路志望未定者がなくなり、すべての生徒が自分の進路を実現するために努力している。 （3）国公立大学志願率が増加し、国公立大学合格者は60名を超えている。	（1）（2）キャリア教育全体計画に基づき、「夢ナビ」ライブ、進路講演会、進路学習「大学生に聞く」、志望理由書作成等の取組に有機的連関性を持たせ、面接指導を適宜実施し、進路目標をより明確にさせる。 （3）土曜自習・質問教室（OBOG大学生をアシスタントティーチャーに招聘）、錬成補習、土曜サテライン授業、勉強合宿等によって、大学入試センター試験に対応し国公立大学に合格できる学力を身につけさせる。	（1）（2）職業別講演会（1年）、「夢ナビ」ライブ（6月、大阪、1・2年164名）、主要大学説明会（9月、大阪、1年40名）、進路講演会（6月、3年）、進路LHR「大学生に聞く」（9月、1年）、志望理由書作成（2・3学期、2年）、土曜自習・質問教室（通年）、担任面接（通年）、教科担任面談（2・3学期、1年）等を実施し、学習指導を通して進路意識の高揚を図った。 （3）大学入試センター出願率（総合・探究コース）は75%であり、前年度比で10%増加した。	C	（1）（2）冬季補習（全学年）、土曜サテライン授業（3年12月以降、1・2年2・3月）等を実施し、学力向上を通して進路意識を明確にし、進路実現をより確かなものにしていく。 （1）（2）（3）国公立大学・学部研究をより充実させ、理系志望増加を目指した進路指導を行うとともに、理数系教科の基礎学力を充実させる。
魅力あるコースつくり	各コース（探究・総合・体育）の活性化	【探究コース】探究ゼミを年2回（9月・校内、12月・八東体育文化センター）、鳥取大学体験実習を3学部7コースで実施した。 【総合コース】2年研修旅行の研修先・内容を改善することによって、生徒の進路意識の高揚につながった。 【体育コース】全国大会出場者が19名であった。体育コース集会等により、生活面・学習面に踏み込んだ指導ができた。	【探究コース】生徒自らが課題を見つけ研究テーマを設定する積極的な探究ゼミが行われているとともに、鳥取大学体験実習が全学部で実施されている。 【総合コース】研修旅行が、生徒の進路意識を高める日程・内容である。 【体育コース】全国大会出場者が25名以上であり、学校生活、部活動をリードしている。	【探究コース】鳥取環境大学、企業、地域等との連携を図り、探究ゼミの活性化を図る。鳥取大学との連携を密にして、体験実習を全学部で実施できるよう調整する。 【総合コース】生徒の興味・関心に基づいた特色ある研修旅行を実施する。 【体育コース】体育コース集会等により、学校生活、部活動のリーダーとしての自覚を促す。	【探究コース】探究ゼミでは、鳥取環境大学教授の講演（5月）、企業家訪問（6月）と並行して個別ゼミによる研究活動が行われ、中間発表（10月）を実施した。概ね当初の計画通りである。 【総合コース】クラス・生徒の興味・関心にあわせて企業・大学等研修を実施し、進路意識を高めた。 【体育コース】体育コース集会（毎月）、オリエンテーション合宿（4月）、ウェイトトレーニング講習（5月）、郡家東・西小学校スポーツテスト指導（6月）、臨海実習（7月）、集団行動（9月）、コンディショニング講習（10月）等による特色ある行事と合わせて、学習面・生活面に踏み込んだ指導を行った。体育コース生の全国大会出場は24名である。	B	【探究コース】探究ゼミの日程と学校行事とのバランスを考慮して研究活動を行う。 【総合コース】進路志望が多様なコースの特色を出すために、例えば、研修旅行ではクラス行動の比率を下げる等の工夫が必要である。 【体育コース】特色ある行事を継続実施し、学習面・生活面の充実を図る。
地域を支える人づくり	八頭町内中学校等との連携推進	（1）小中高の担当者が建設的な関係性を構築できるスクラムリーダー会によって、学びの姿勢や学習状況の調査結果を協議・検討し、平成28年度の課題を設定することができた。 （2）数学科によるスクラム教育、文科省英語教育強化拠点事業によって、連続した学びの課題を見出し、その克服に向けての研究実践を進行している。 （3）八頭高ライフ体験（5教科等7講座）、夏季特別勉強会（数学）、「先輩に学ぶ」（学習会）を実施し、中高連携を図った。	（1）スクラムリーダー会が小中高連携の主体となり、小中高の課題を共有した上で、連続した学びの研究を進めている。 （2）小中高の連続した学びをレベルアップさせるために、効果的な指導法を研究・実践している。 （3）中高の現状を把握し、中学生と高校生の学び合いを通して学力向上を目指している。	（1）地域との関わりをさらに強化するために、八頭町内中学校等との連携を積極的に働きかける。 （2）小中高担当者が課題を抽出・分析し、教科指導力向上を目指す指導法を改善し、実践する。 （3）中学生・高校生がともに学び合う実践を計画・実践する。	（1）スクラムリーダー会（週1回）において、教材研究、学習指導案作成、アンケート分析等を行い、小中高の連続した学びの在り方を模索している。 （1）（2）（3）八頭タワー（教科でつながる「鳥取発スクラム教育」）充実事業として、数学授業研究会（6月、10月、中学校・高校における高校教員の授業）、夏季特別勉強会（7月、高校生・中学生参加）等を実施し、八頭郡内の中学校と連携を図った。また、文科省英語教育強化拠点事業による授業研究会（7月）を実施し、小中高の英語教育実践について研究協議を行った。	B	（1）（2）（3）文科省英語教育強化拠点事業（11月、小中高の連携）、八頭高ライフ体験（八頭タワー、2月、中学生参加）等を実施し、小中高連携を深化させる。 （2）平成26年度から3年間にわたった八頭タワー充実事業は今年度末をもって終了するが、次年度以降も中高合同授業研究会、八頭高ライフ体験、夏季特別勉強会等の継続実施によって、中高連携による授業力向上、学力向上を図る。

評価基準　A：十分達成〔90%〕 B：概ね達成〔80%程度〕 C：変化の兆し〔60%程度〕 D：まだ不十分〔40%程度〕 E：目標・方策の見直し〔30%以下〕